

あるむぜお116

府中市郷土の森博物館だより

al museo NO. 116

2016年6月20日



伊勢丹の屋上から見た府中駅の駅舎（2008年撮影）

目次

- 1-2 祝！府中駅誕生 100 年
 - ①京王電車がとあるまで
- 3 最近の発掘調査
奈良時代の竪穴建物跡から勾玉が出土
- 4-5 ノート 中世の安養寺
- 6 展示会案内
企画展 発掘された中世遺跡
- 7 展示会案内
特別展 京王線がとあったころ
- 8 たまがわ野鳥セレクション
①水辺の宝石カワセミ
- 9 平成 27 年度寄贈・寄託資料一覧、利用状況、
新刊案内
- 10 連載 『県居井蛙録』にみる江戸時代の庶民の生活
⑤米や麦をつくる

祝！府中駅誕生 100 年

京王電車が新宿と府中の間に開通したのは、1916年（大正5）のことです。その時誕生した府中駅は、今年100歳になります。この大きな節目に、京王電車の開通を軸に、府中の近代を振り返ってみたいと思います。

①京王電車がとあるまで

写真は、府中市の中心地、ケヤキ並木の東側にある府中駅の駅舎です。高架化により1993年（平成5）から現在の姿になりました。

府中駅誕生100年を記念するこのコーナーの初回は、府中に駅舎がつくられる以前の明治時代初期に時間を戻し、京王電車が開通するまでの府中の近代を紐解いてみましょう。

祝！府中駅誕生 100 年

①京王電車がとおるまで

府中駅誕生 100 年を記念するこのコーナーの初回のお話は、京王電車開通の 45 年前からスタートします。京王電車の開通は 1916 年（大正 5）。その 45 年前は、1872 年（明治 5）年です。この年、前年実施した廃藩置県により中央集権的な政治体制を整えた明治政府は、さまざまな制度改革に着手しました。そのうちのひとつ、宿駅制度の廃止は、江戸時代から甲州街道の宿場としてにぎわってきた府中に、大きな影響を与えました。

まず、宿場について簡単にご説明しましょう。宿場には、公用の人や荷物に対し人馬を用意して隣の宿場まで運ぶ「宿継」や、宿泊施設の提供が役割として課せられていました。この際の賃金は、無賃か低い料金設定になっていたため、その不足分を補填するために、一般の運送業務や旅籠屋の営業、市の開催などが許されていたのです。この結果、宿場は物流の拠点として、地域の経済的な中心となりました。

明治政府が宿駅制度を廃止した理由には、江戸時代末期の社会的動乱により宿場が疲弊したことが挙げられますが、馬車と鉄道の出現や、郵便制度などの開始も大きな要因でしょう。欧米からの技術や制度の導入により宿駅制度は必要なくなったのです。これにより宿場として長い歴史を歩んできた府中も、さまざまな変革を迫られることになりました。

明治時代初期の府中には、新制度に伴う施設が複数設置されています。1872 年 3 月には、番場宿（現・宮西町）の矢島九兵衛家に郵便取扱所が開設されました。また、その 6 年後の 1878 年に多摩地域が西・南・北の三郡に分かれると、北多摩郡役所が同じく番場宿に置かれました。この時期の府中は、いまだ地域の経済的・政治的中心地として機能していたのです。ところが、1889 年に甲武鉄道（現・JR 中央線）が開通すると、その立場は大きく揺らぐこととなります。

初期の鉄道は、主たる輸出品であった生糸の産地と東京や横浜を結ぶルートを中心に敷設されました。甲武鉄道も、東京と生糸の一大集積地である八王子を結ぶ路線で、府中の北方を線路が一

直線に走っています。この鉄道の開通以後、物流の拠点は停車場が置かれた国分寺に移り、府中の経済的立場は低下していきました。

この状況を打開すべく、府中の人々も鉄道の誘致に動いています。1901 年には川越鉄道に国分寺・府中間の線路延長を働きかけ、鉄道用地の取得にも取りかかりました。しかし、川越鉄道にとって延長はメリットがないものだったようで、交渉は暗礁に乗り上げました。その結果、計画を断念せざるを得なくなりました。

そのような府中に画期が訪れたのは、明治時代も終わりに差しかかったころのことです。建材として多摩川の砂利の需要が高まり、その運搬のために東京砂利鉄道（のちの下河原線、現在は廃線）が敷かれることになったのです。念願の鉄道敷設の決定です。府中では、国分寺と下河原（現・南町）をつなぐこの鉄道に、砂利だけでなく人と貨物を運んでもらうことを期待して、人的・金銭的な協力を惜しみませんでした。しかし、1910 年に東京砂利鉄道は無事開通したものの、旅客を運ぶことなく、1914 年の多摩川の洪水で営業を停止しました。府中の人々の落胆はいかばかりだったでしょう。

このような状況下に、やっと府中に開通したのが京王電車なのです。これにより府中は新たな発展をとげることになるのですが、それは最終回にお話しするとして、今回は甲武鉄道開通にまつわる「鉄道忌避伝説」について考えてみたいと思います。（花木知子）



大正初期の北多摩郡役所

奈良時代の竪穴建物跡から

勾玉が出土

白糸台六丁目 府中市ふるさと文化財課 西野善勝



勾玉が出土した様子

今年の冬に白糸台6丁目で実施した遺跡発掘調査で勾玉が1点出土しました。奈良時代に使われた竪穴建物跡の床面付近で発見されたのです。半円形に近い形状で、全長は3.5cm、重さは約20gあります。全体的に白っぽい石材で、一部に緑色を帯び、手に取ると少し重みを感じるころから翡翠の可能性もあります。

勾玉は、縄文時代にはすでに作られていたもので、弥生時代や古墳時代にも作られています。奈良・平安時代にも勾玉はありますが、多くは伝世品と考えられます。奈良東大寺の不空鞞索観音の宝冠にも飾られているそうです。

翡翠は、宝石の一つに数えられています。古代の翡翠産地は新潟県糸魚川で、翡翠の勾玉は日本列島各地で出土しています。

市内ではこれまでに6点の勾玉が見つかっています。その中で最も古いのは、宮町3丁目の土坑から出土した土製の勾玉です。縄文時代のものと考えられます。弥生時代のものはまだ発見されていません。古墳時代のものは、小柳町1丁目で発見された白糸台10号墳の石室から、首飾りとみられる小玉27点と共に出土した2点と、分梅町1丁目の高倉1号墳の近くから出土した1点があります。これらの勾玉は滑石製です。ほかに、日吉町1丁目では、希少なガラス製の勾玉の破片が出土しています。

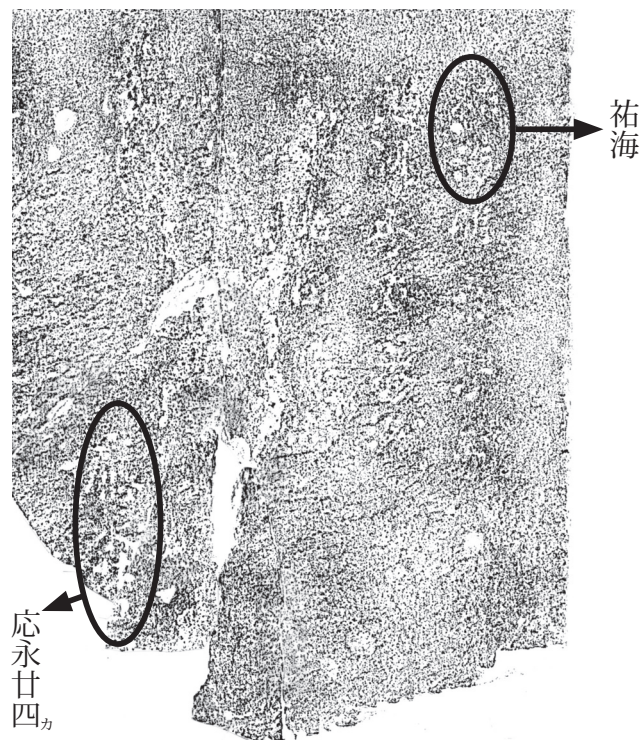
今回の出土品と同じように竪穴建物跡から出土したものもあります。宮町1丁目の奈良時代の竪穴建物跡のほぼ床面から首飾りと考えられる石製の丸玉22個と勾玉1点が出土しています。

今回出土した勾玉は、市内で出土した勾玉の中では、最も大きく、形も良く、石材も良質で翡翠の可能性もあるものなので、古墳時代の支配階級の所有物だったと考えられます。竪穴建物跡が白糸台古墳群の範囲にあることから、白糸台古墳群の被葬者の副葬品が竪穴の住人の手に渡ったのかもしれませんが。

勾玉は、現代では工芸品として生産されています。神秘的な魅力に引きつけられる人もいるようですが、古代の人々には、もっと大きな価値のあるものだったと思われるかもしれません。そんな貴重なものを、なぜ竪穴建物跡に残していったのでしょうか。そこにはやむにやまれぬ事情があったのかもしれませんが。



出土した勾玉（実物大）



安養寺所蔵板碑 拓本 右は銘文の拡大

▼ はじめに

府中市本町1丁目に安養寺という天台宗の寺院があります。江戸時代後期の1830年に完成した『新編武蔵風土記稿』には、

矢崎にあり、叡光山佛乗院と号す、天台宗、東叡山の末、御朱印十五石の寺領を附せらる、末寺三院、門徒十一寺を統、・・・川越仙波喜多院と同く慈覚大師の開山なりと云、寺伝に永仁四年勅によりて再興ありと云、尊海僧正を以て中興開山となす、・・・

とあって、平安前期、慈覚大師が開山、永仁4年(1296)に尊海僧正が再興したと伝えていることがわかります。しかし残念なことにそれを証明する中世以前の確実な史料はなく、古代・中世の安養寺は伝承の域を出ないと判断されてきました。

ところが最近、中世の安養寺にかかわる史料の存在が明らかになりました。ここではこの新たな知見の一端を紹介しようと思います。

▼ 中世安養寺でしたためられた聖教

聖教とは釈迦の説いた教えやそれを記した経典・書物のことです。寺院社会では僧侶たちが仏法を受けつぐため、教書の内容が盛り込まれた聖教を講読したり、筆写したりしました。それが各地の寺院などに残されているのです。

そうした聖教のなかに、府中の安養寺が登場します。栃木県日光市にあり、輪王寺が所蔵する聖教がそれです。『法華玄義抄』の第二抄の扉書に、

法華玄義第二問書下祐海 武州府中安養寺同書の奥書に

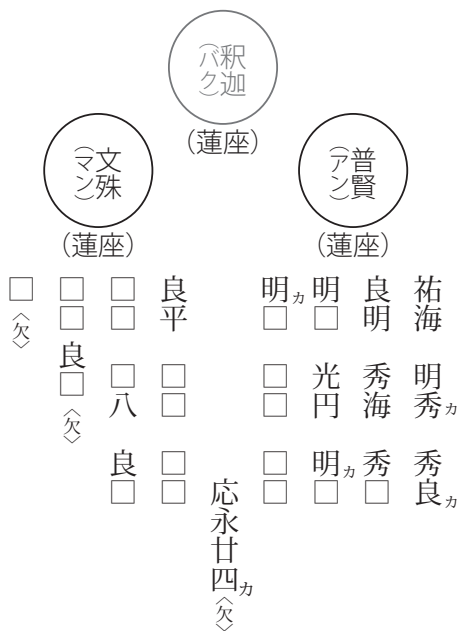
応永七年庚辰三月十二日書之畢 祐海とあるのです。この『法華玄義抄』は応永7年(1400)3月12日、祐海という僧侶によって府中の安養寺で書写されたことがわかります。これによって、室町時代に安養寺が存在したことは事実となりました。

輪王寺は、東照宮、二荒山神社とともに世界遺産に登録されている天台宗の寺院ですが、その

歴史は古く、開創は奈良時代と伝えられ、永く日光山信仰の拠点でした。戦国期には一時衰退したものの、江戸時代の初頭に天海が貫主（住職）となると復興が進み、広く天台関係の聖教が収集されたのです。ここで紹介した『法華玄義抄』も、そうした経緯で輪王寺の所有に帰したもののなのでしょう。

▼ 祐海が建立した板碑

さて、ここで興味深いことに気づきました。「祐海」の名が刻まれた板碑が、安養寺にあるのです。主尊は失われているものの、普賢菩薩と文殊菩薩を示す梵字の下に9行の銘があり、現存の長さ75cm、幅は45.5cmあります。この横幅からすると、造立時の大きさは高さ170cmを超え、府中市域では1・2位を争う大型板碑であったと考えられます。失われた主尊は、文殊と普賢を脇侍としていたことから、釈迦如来とみてよいでしょう。天台教学にふさわしい尊像といえます。9行の銘文は、磨滅と折損によって判読が難しいのですが、中央（5行目）の下方に「応永廿」とあるのは確実です。それ以外の行には、各行3名の人名が刻まれているようで、1～4行目には僧名ないし法名、6行目以降は一層判読が難しいのですが、俗名を書き連ねているようです。そして1行目の筆頭に刻まれているのが「祐海」なのです。具体的な目的は不明ながら、この板碑は、おそらく応永24年（1417）に、祐海が主導して、



23名の僧俗の協力を得て造立したものとみなしてよいでしょう。

『法華玄義抄』の書写年とは若干の開きがありますが、両者にみられる祐海が同一人物である可能性は極めて高いと判断します。1400年代の初頭ころ、祐海という僧侶が安養寺を舞台として盛んに活動をしていたことが推測されます。

▼ 安養寺の縁起と聖教

輪王寺には安養寺に関係する聖教がもう一つあります。『法華玄義抄』第一抄の奥書に
 元徳二年八月五日 於府中御水河坊書写畢
 等海（花押）
 とあるのがそれです。元徳3年（1330）、府中にあった御水河坊で等海が書写したものです。御水河坊は現存せず不明ですが、等海は安養寺の縁起にも登場する人物なのです。

縁起の関連する部分をかいつまめば、
 等海のもとに正体を隠して仕えていた狸の筑紫三位という弟子がいた。ところがある日、その正体を師に知られてしまう。狸は「ご恩返しに教えを受けたことを実現しますので、明日人見ヶ原に来てください」といって去って行った。翌日、等海が弟子たちと人見ヶ原に行くと、浅間山のあたりに七宝瑠璃で飾られたお釈迦様があられた・・・

といったところでしょうか。等海の府中での活動が確認できたからには、この縁起も改めて読み込む必要がありそうです。人見ヶ原や浅間山は現在の若松町や浅間町付近のことで、江戸時代には安養寺の末寺の幸福寺があったことも興味を惹かれます。化け狸の話はともかく、縁起の登場人物や舞台は、なんらかの事実を反映していると考えてよいでしょう。

新たに確認された聖教と板碑や縁起が密接に絡んでくれたおかげで、ささやかではありますが、中世の府中を語る材料を増やすことができました。府中に関する中世史料の発見はそうそう期待できませんが、聖教はまだまだ開拓の余地がありそうです。今後も、注目していきたいと思います。

展示会案内

企画展

発掘された中世遺跡 — 府中市西府の考古学 —

7月23日(土)～10月30日(日)

会場：本館 2階企画展示室

観覧：無料

今から239年前の江戸時代、府中第五小学校の付近で、中世の板碑や壺が掘り出されました。幸運にして、板碑は縁あって国立市の谷保天満宮に、壺は地元の旧家に伝えられ、大切にされてきました。壺を保管する旧家には、出土の経緯などを記した古文書までも残されています。

板碑は、刻まれた銘文から、延文5年(1360)に津戸勘解由左衛門尉管原規継という武士の菩提を弔うため、沙弥道継によって建立されたことがわかります。府中市内でこれまでに600点を越す板碑が確認されていますが、この板碑はだれがいつ何のために造立したのかが明らかなものとして貴重です。そればかりか、この地に津戸を名乗る武士がいたことをも教えてくれます。

このように、古くから中世の出土品があったことは知られていたものの、付近で発掘調査が行われることはほとんどありませんでした。ところが、この地を横断するように敷設されているJR南武線に、新たに〈西府駅〉ができることになると、状況は一変します。畑が広がっていた一带に、駅舎、道路、マンション、商業施設などが次々と建設され、それに先だって発掘調査が行われるようになったのです。そして、中世の屋敷群が発見されたのでした。

府中は古代以来の政治都市ですが、西府駅付近は、府中の中心部からはおよそ2km西方に離れたところにあります。当時の幹線道である鎌倉街道上道は中世都市・府中の西端を南北に縦走していますが、この道からもおよそ800m西に離れています。

そうした場所で、発見された屋敷群は、溝で区

画されたもので、予想をはるかに超える規模でした。中世の塚、墓地もあります。伝承では、寺院もあったといわれています。実態解明はまだ緒に就いたばかりですが、近年の発掘資料のみならず、江戸時代に出土した板碑や壺、地元で伝えられてきた板碑なども交えて、遺跡の実像を探ってみたいと思います。(深澤靖幸)



江戸時代に出土した常滑焼の壺と板碑



発掘された掘立柱建物跡と区画溝



特別展

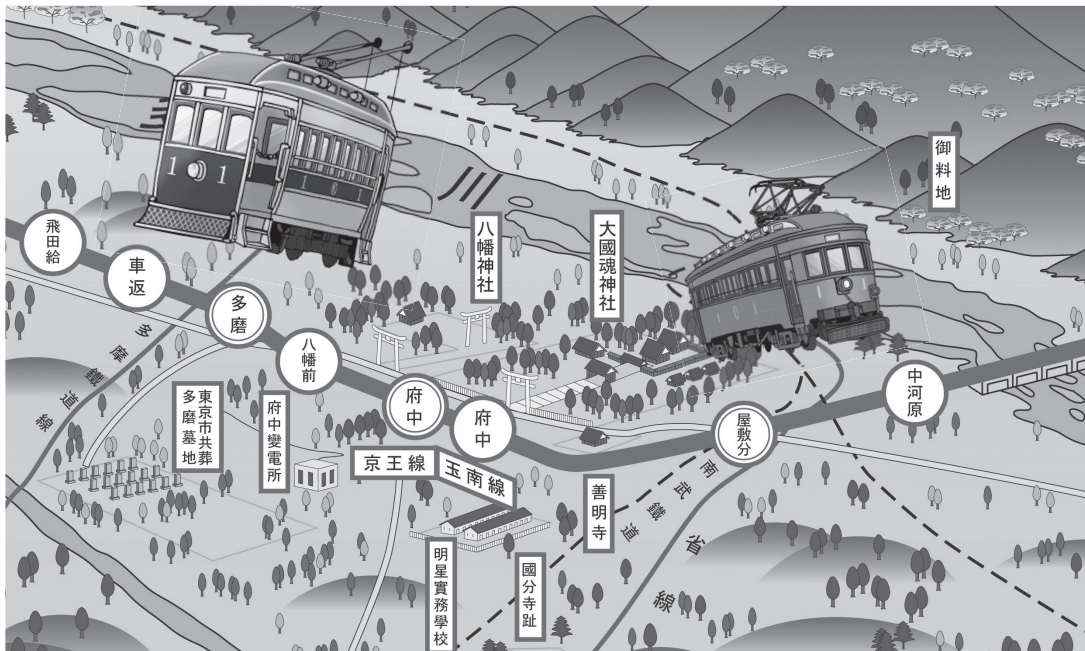
京王電車がとおったころ～府中駅誕生 100 年記念～

7/16（土）～9/4（日）

会場：本館 1 階特別展示室

観覧：無料

後援：京王電鉄株式会社



今年、京王電車が新宿・府中間に開通してから 100 年目にあたります。当館では、その大きな節目を記念し、京王電車の開通を軸に府中の近代を見直したいと考え、特別展を開催することにいたしました。

この展示会では、近代における府中の変化を紹介するために、5 つの転換点（ターニングポイント）を設定しました。最初の転換点は 1872 年（明治 5）。この年宿駅制度が廃止され、甲州街道の宿場としてにぎわっていた府中は、近代化の潮流の中で新たな姿を模索することになりました ①。

その後、②甲武鉄道の開通、③砂利運搬用の鉄道の敷設、と転換点が続きます。この過程については、2 ページの「祝！府中駅誕生 100 年」で紹介していますので、ご一読ください。

①から③へ時代を経るにつれて、府中が江戸時代に有していた経済的な立場は、徐々に低下して

いきました。そのような状況を打開してくれたのが、④京王電車の開通だったのです。これにより、都心と短時間で結ばれたことが、新たな発展をとげる契機となりました。

最後の転換点、⑤玉南鉄道の開通により府中と東八王子が結ばれ、その後新宿・東八王子間の直通運転が始まりました。同じ頃には、ほかの鉄道も開通して交通網が整備され、東京の近郊という府中の位置づけがはっきりとしてきました。膨張する東京の受け皿となった府中には、多磨霊園や競馬場などの大型施設や学校、企業の工場などができ、人口も増加していったのです。

5 つの転換点のうち、現在の府中の発展につながる最も大きな出来事は、京王電車の開通でした。ここから府中の巻き返しが始まったといえます。開通から 1 世紀という記念の年に、この展示会で、その意義を再認識していただくと幸いです。（花木知子）

やまがも野鳥セレクション



撮影：影山昇（府中野鳥クラブ）

①一水辺の宝石— カワセミ

東京の緑が年々後退するなかで、府中の自然が豊かな理由の一つに多摩川の存在があります。市の南縁を流れる中流域の多摩川は、様々な環境に分かれています。水中部分をはじめ、中洲や水際、大きく広がる河原や土手といった具合です。動植物にとっては、同じエリアの中で棲み分けのできる大変ありがたい活動場所であり、生育場所でもあるのです。特に多摩川は、野鳥の宝庫として有名で、一年中見られる留鳥はもちろん、渡り鳥たちの繁殖・越冬・中継地としても利用されています。そんな多摩川で観察できる特徴的な野鳥にスポットを当てて紹介します。

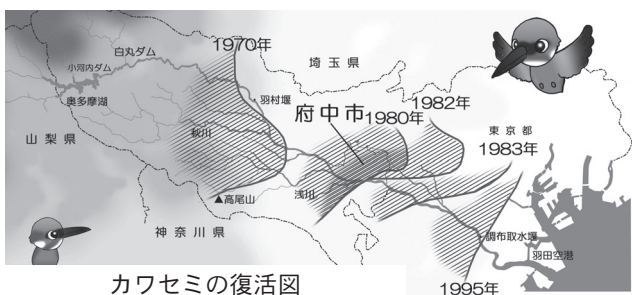
長い嘴に青い羽根、眩しいオレンジ色の腹・・・なんてきれいな配色でしょう。多摩川の水面を横切る姿は、まさに宝石が飛翔しているようにも思える程です。その正体は、魚捕りの名人・カワセミです。カワセミは、『古事記』にも緑を意味する「ソニ」の名で登場しており、漢字では翡翠と書きます。宝石のヒスイはここから名付けられたものです。黒く太い嘴が体の4分の1を占める変わった形で、さらに背中から腰にかけて輝くコバルトブルーの羽毛は絶品です。生息域は池や川などの水辺で、小魚や水生動物を主食としています。水中の獲物に狙いを定め、ダイビングすると一発で魚を捕らえます。子育ては、土手や崖を利用して、横に長く掘った巣穴を使います。

元々カワセミは大正や昭和の初めまで都心部でも普通に見られましたが、戦後の経済復興に伴い、川や池の環境が悪化すると、たちまち郊外に退行していきました。農薬や工場排水で水質が低下し、次々とコンクリート化される水辺の環境では、巣穴を掘る土手さえも無くなってしまったのです。都市部からカワセミの姿が消えたのは1964年頃、ちょうど前回の東京オリンピック開催で市街地の急速な整備が進んだ時です。それで

も郊外の府中市域では、多摩川の存在がカワセミを留めていました。1970年代に入ると、汚染の波がついに多摩川にも及び、アユも泳いだ清流は汚濁の川に変貌しました。魚類をはじめとする動植物たちは激減し、棲み家を失ったカワセミはさらに奥へと退行し、日野市の先から上流部の奥多摩エリアに足を運ばない限り、確認ができなくなってしまったのです。魚類激減は、連鎖的に餌の乏しくなった川から野鳥たちの撤退を招いたわけですが、中でも多摩川に翔ぶカワセミが姿を消したことは、同じく水中の宝石と呼ばれたアユ消滅と合わせてのダブルパンチでした。

その後、多摩川は下水道の普及などに伴い急速な回復を目指します。市街地においても農薬散布や工場排水の規制で、環境劣化に歯止めがかかりました。結果、一時は幻の鳥とも呼ばれたカワセミは、1975年頃から中流域で度々目撃されるようになり、1980年には上流部の支流で営巣地が増えるとともに、中流域の府中市是政や多摩動物園内でも繁殖が確認されたのです。また、春・秋渡りの季節や冬期では都心の池でも姿を現すようになり、1990年代には以前と同様の生息範囲に戻りました。大きな原因は、多摩川の水質が浄化するにつれ、比較的汚れた水でも生息可能なモツゴやフナと言った小魚、アメリカザリガニなどが息を吹き返し、カワセミにとっては手ごろなサイズの餌が増えてきたことにあるようです。ただ、面白いのは、復活後のカワセミ自身の変化です。警戒心の強かった鳥は、もはや人を恐れず、土壁の巣穴に代わる塩ビ管などの人工物を利用しながら臨機応変に営巣する適応力さえ身につけていたのです。受入れ側の人間が、愛鳥と保護の意識を高めていたことも復活を後押ししたのでしょうか。もはや、都市化の進んだ新たな空間に、ある程度の妥協をもってカワセミが適応し直して来たと考える方が正しいのかも知れません。

(中村武史)



平成 27 年度
寄贈・寄託資料一覧

平成 27 年度
利用状況

No.	寄贈・寄託者 (敬称略)	資料名	分類	数量	受入
1	浅見 一郎	京王線関係資料	歴史	36 点	寄贈
2	平岡 正之	京王線開業 90 周年バス ネット ほか	歴史	3 点	寄贈
3	浅見 一郎	京王線関係資料 ほか	歴史	238 点	寄贈
4	松本 正彦	板碑	考古	3 点	寄贈
5	東京都福祉局	鬼瓦	考古	1 点	寄贈
6	相原 元司	鍛冶屋道具	民俗	一式	寄贈
7	荒井 寛	羽子板・五月人形	民俗	2 点	寄贈
8	橋本 隆男	半纏	民俗	1 点	寄贈
9	松本 正彦	扇風機・へら台	民俗	2 点	寄贈
10	鹿野 佐織	ひな人形・羽子板	民俗	3 点	寄贈
11	田中 誠一	御嶽講用具	民俗	一式	寄贈
12	佐藤 はるか	郷土の森復元建築物水彩画	美術	8 点	寄贈
13	村野 晃一	村野四郎蔵書・書棚	村野	一式	寄贈

区分	有料		減免 (障害者・ 4歳未満等)	合計	
	一般	団体			
博物館観覧者 開館日数 305 日	大人	153,844	4,952	45,160	203,956
	子供	26,116	14,669	50,117	90,902
	小計	179,960	19,621	95,277	294,858
上記のうち プラネタリウム観覧者 投影日数 206 日	大人	26,510	1,903	5,435	33,848
	子供	13,332	8,531	5,835	27,698
	小計	39,842	10,434	11,270	61,546



新刊案内

☼ 『府中市郷土の森博物館紀要』 29 号 400 円
学芸員他による研究報告・論文集です。

- ・「国府のマチ」模型制作に関する覚書 [深澤靖幸]
- ・「府中宿町並模型」の増設と「高札場」の再現
－ 常設展示室リニューアルにおける検証の経緯－
[花木知子]
- ・六所宮の摂社・末社と松尾神社 [小野一之]
- ・鬮之宮神社と神社講
－ 旧府中宿における土着信仰の継承－ [下村盛章]
- ・徧無為 依田貞鎮による
聖徳太子神儒仏三教調和思想の展開 [野田政和]
- ・養蚕と盆行事
－ 近代における盆行事の日程変更とその分布－
[佐藤智敬]

☼ 府中市郷土の森博物館ブックレット 17

『よみがえる古代武蔵国府』 500 円

古代武蔵国府の 40 年に及ぶ発掘成果を一冊にまとめました。2005 年刊行のブックレット 6 以降の 10 年間の調査成果を踏まえた最新作です。

☼ 府中市内家分け古文書目録 18

『新宿 比留間家文書目録 II』 300 円

新宿(現・宮町)の旧家・比留間家から寄贈された古文書の目録を、検索が便利な CD 版で刊行しました。

※新刊は、本館 1 階ミュージアムショップにて発売中です。

資料をご寄贈ください！

博物館では、次の資料を集めています。
所蔵されている方で、博物館に寄贈しても良いという方がいらっしゃいましたら、ご一報ください。

- * 昭和 40 年代以前の家電製品
- * 江戸時代から昭和 30 年代ころの古文書
- * そのほか、地域の歴史・文化・自然に関わる資料

★「あるむぜお」は定期購読できます！★

「あるむぜお」の送付ご希望の方は 1 年単位で承ります。4 回分の送料 328 円(切手でも可)を添えて、受付カウンターでお申込みください。

連載 『県居井蛙録』にみる江戸時代の庶民の生活

『県居井蛙録』は、住吉町の旧家・内藤治右衛門家に残されていた、享和2年(1802)から天保7年(1837)にいたる日々の記録です。4代当主重高と5代当主重英によって著されたこの史料には、当時の庶民の生活に関わるさまざまな出来事が記されています。本コーナーでは、毎回テーマを決めてその内容を紹介します。

「県居井蛙録」には、くらしのなかで必要だった農作業について記されている箇所が多くあります。35年間すべての年に記されているのは稲作の「田植え始め」です。内藤治右衛門家は水田地帯にありました。それゆえに毎年の田んぼに関する仕事が多いのです。

そのほか、当時は重要な農作物だった、麦に関する記載もあります。大麦、小麦、そして田麦の3種類をまく(9月～10月頃)、刈る(4月～5月頃)といった作業です。小麦、大麦、田麦の順でまき、田麦、小麦の順で刈り取っています(大麦刈り取りの記録はありません)。ここに出てくる「田麦」とは、品種ではなく「田んぼに植える麦」という意味らしく、どんな種類の麦なのか定かではありません。

稲刈りと麦まき、麦刈りと田植えの日程が重ならず、しかも作業の間が10日以上あいているところから、稲刈り後の田に麦をまき、麦刈り後の田に稲を植えていると考えられます。つまり、同じ田んぼを使用して麦と米とをつくる、二毛作をしていたことがわかります。稲が水を好むのに対し、麦は比較的乾いた土地を好みます。田んぼは5月中旬～9月頃までは水田になり、9月後半から5月初旬頃までは麦を育てるために水を張らない麦畑(麦田)へと姿を変えたのです。

成長した田麦を刈り始めるのは、早い年で4月9日(新暦1806年5月26日)、遅い年

⑤米や麦をつくる

で5月16日(新暦1835年6月11日)でした。現在でも、「麦秋」と呼ばれる麦の刈りごろは、新暦の5月下旬から6月初旬頃を指しますから、江戸時代もほぼその時期に準じて麦刈りをしていたといえるでしょう。

麦を収穫すると、乾燥、脱穀、製粉などの作業が大変です。そして、並行して田んぼでは稲作用に田起こしをし、用水から水をはり、代かきを経て田植えがはじまります。田植え始めは、早い年は4月29日(新暦1830年6月19日)、



収穫間際の小麦畑

遅い年は5月27日(新暦1835年6月22日)でした。この日、稲を植えるための女性・早乙女をそろえた、という記録も1809年(文化6)10人、1825年(文政8)6人、1829年(文政12)5人の3回あります。もちろん、記録されていなくても同じような作業が毎年続いていたことは想像に難くありません。

「田植えは、麦が終わった新暦の6月中旬～下旬頃で、遅くなったら7月初旬のこともあったよ」という話を聞きます。その話のとおり、現在でも5月下旬頃の麦刈り、6月の田植えが中心です。つまり、府中の農家は、少なくとも約200年前の江戸時代には成立していた農事暦に準じた米、麦づくりを現在も継承しているといえるのです。

府中では現在、二毛作はほぼ行われていないようです。米と麦は別の場所で作られているので、田麦という言葉も聞かれなくなりました。このように時代とともに変化した部分もありますが、大枠は江戸時代と変わらないのです。農事暦の記録と伝承を通して見える、日々のくらしの積み重なりに、敬意を覚えずにはられません。(佐藤智敬)